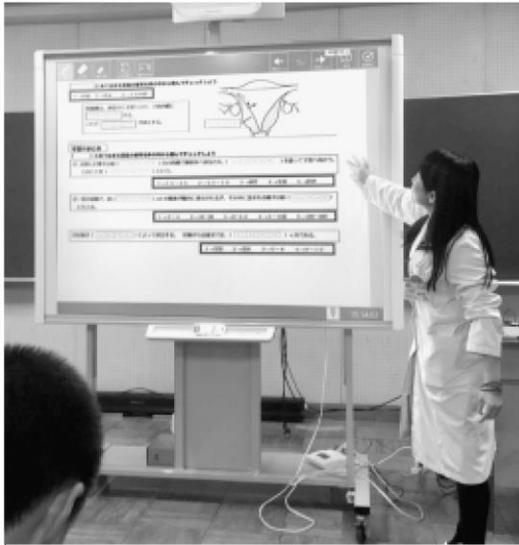


特集

デジタルテストでインタラクティブに 船橋市立古和釜中

養護教諭が「性教育」テーマにICT活用

船橋市立古和釜中学校(本田博行校長・千葉県)は今年度、船橋市教育委員会のICT機器活用推進校として、タブレット端末(iPad)40台、タブレットPC(Windowsタブレット)40台が配備された。全学級の電子黒板、デジタル教科書、授業支援システム、デジタルテストシステム「アンサーボックスクリエイター」(Answer Box Creator、以下「ABC」と共に9月末から活用を開始。12月には養護教諭の中村美智恵教諭が「性教育」をテーマに、電子黒板と授業支援システム、タブレットPC、デジタルテストシステム「ABC」を活用して授業を展開した。



デジタルテストの解答後はすぐに自己採点。結果は教員用PCで共有できる。

わる性教育は、生徒とイ

ンタラクティブなやりとりがしにくく、一斉授業になりがちな学習テーマ。そこで、これまでの教材にABCを組み合わせ、その場で生徒の解答を確認して次の質問を考えるなど授業にインタラクティブな要素を追加することで、このテーマを前向きに楽しく捉えるきっかけづくりができればと考えた。これまで蓄積してきた自作教材を電子黒板での提示やデジタルテストに活かすなど活用しやすい点も大きなメリット」と語る。

養護教諭が担当できる授業時間は限られているように、生徒のタブレットPC活用を学習のまよめの時間に15分間設定。この時間の捻出のため、授業デザインを再構築して臨んだ。

授業は視聴覚室で行った。生殖機能の成熟について、自作教材のアニメ

ーションやスライド、NHKの動画を使って電子黒板で説明し、妊娠12週目や9か月目の胎児の大きさなどは大豆や絵などを配布して見せた。

ワードやパワーポイントなどで蓄積していた教材を「ABC」でデジタルテストとして作成し、最後の15分間にタブレットを使った学習のまとめを行った。自作教材に解答欄を追加するだけでデジタルテストを作ることができるので、短時間で作成できたという。

生徒は各自タブレットでデジタルテストを解き、自己採点も自動で行う。説明に使われたものと同じ図版をデジタルテストにも使っているの

で、記憶が定着しやすいようだ。間違ったところは中村教諭が作成したプリントを使って各自で振り返る。

その間、中村教諭は、授業支援システムで回収した生徒の解答を確認。その場で集めることができたので、生徒の定着度がすぐにわかる。

生徒の事後アンケートでは「採点が一瞬ででき

るので自分のペースで振り返りができた」「デジタルテストで良い復習ができた、楽しかった」という感想が見られた。通常の小テストでは解答が難しい特別支援の生徒が、デジタルテストでは解答できたことも大きな発見であった。

この授業内容を市の情報教育部会で発表したところ、養護教諭の参加も多かった。船橋市の養護教諭は長年、情報共有をグループウェアやメールで進めてきた。

ため、ICT活用に積極的なようだ。中村教諭は「今後は正解率なども集計して、今後の授業改善に活かすことにも挑戦したい」と話す。来年度に行う3年生を対象にした性感染症の授業に向け、準備を進める考えだ。

本校校長は「ICT環境が整備されて数か月で、良い実践が生まれている。今後は、これを全教科で展開できるように、さらに活用しやすい環境を検証していく。本校の実践が市内の学校に広ま

るよう取り組んでいきたい」と語った。

同校では11月、英語教育研究会の会場校として、オーストラリアとビデオ会議を行った。本校校長は「生きた英語を学ぶには、海外交流が役に立つ。そのためにはタブレット端末と電子黒板、スカイプなどを活用できるICT環境が有用

と考える、市のモデル校募集に手を挙げた」と語る。ハード整備と共に、教員がこれまで自作してきた教材をタブレットPCなどですぐに活用できる仕組みの一つとして、デジタルテストシステムはOffice環境でデ

ジタルテストを簡単に作成でき、採点・集計できるシステムだ。この活用に早々に手を挙げた教員の1人が中村美智恵教諭だ。養護教諭として、1年生と3年生の保健体育科で性教育を担当している。「二次性徴や受精、妊娠などに関